

学校職員による 杉谷塾

島原市立第四小学校



1. 目的と内容

学校は、日頃地域の方々に、子どもたちの学習の場の提供、サポートチームとしての授業への協力等、いろいろな面でお世話になっている。そこで、学校としても何か地域に貢献できることはないかという発想に立ち、この杉谷塾の取組を開始した。

杉谷塾とは、本校職員が持っている専門性を生かし、地域の方を対象に講座を行うものである。

2. 活動の状況

これまでに行ってきた「杉谷塾」の内容は以下の通りである。

学校長 講話「子育て再考」

まず、皮切りに校長による子育てに関する講話を行った。いったいどれくらいの方々の参加があるのか心配していたが、隣接の公民館の部屋に集まったのは、保護者を中心に40数名。校長の実体験をもとにした楽しい話で、参加者も熱心に聞き入っていた。



長岡教諭 講義「タフな子どもを育むためには」

続いて行ったのが、当時研究主任だった長岡教諭で、地域や保護者の方にもっと「タフな子ども」について知ってもらいたいという意味も込めての講義となった。タフという言葉の捉え方やこれからの取組などを詳しく説明し、その後の地域・保護者の協力体制にも大いに役立った。

末永教諭 パソコン教室「名刺づくり」

学校職員の中には、比較的パソコンを使い慣れている者が多く、視聴覚担当の末永教諭を中心に数名でパソコン教室を開催した。パソコンの数に限りがあるので、参加者は10数名ではあったが、終始熱心に取り組まれた。最初にパソコンの使い方の指導、次に「自分の名刺づくり」について説明・演習、最終的には、できあがった名刺を持って帰っていただいた。参加者からは、楽しかったとの感想をいただいている。

安倍教諭 絵手紙教室「絵手紙づくり」

16年度は、絵を描くことに趣味を持つ安倍教諭の「絵手紙教室」には、地域にも杉谷塾が広まってきたと見えて、参加者も保護者ばかりではなく、一般の地域の方々の参加も増えてきた。落ち着いた雰囲気の中、ピーマンやレモンをしっかりと描きながら、和気藹々としていた。参加者は、できあがった作品に満足そうな笑顔を見せていた。

田島教諭 スポーツ教室「初心者向けのバドミントン」

体育的なことが得意な職員もいるので、スポーツ教室をしてみようということになり、公民館の家庭教育学級とタイアップして「初心者のためのバドミントン教室」を行うことにした。

12月の寒い時期にもかかわらず、40名を超える参加者があり、参加者からは「もっとしたかった」「また、ぜひやって欲しい」などの声も多く聞くことができた。今回は特に、親と一緒に子どもたちが参加したところも多く、親子で対戦している姿も見られた。



3. 成果と課題

最初は、人前に立つのに慣れているはずの職員も緊張しながらの取組だった。毎回内容の違う取組を数回にわたって行ってきたが、地域や保護者の方々にも少しずつ受け入れられているように思われる。

成果としては、参加者が今まで、あまり興味がなかったことに関心を持ったり、その場で知り合った方と仲良くなったりすることがあげられる。何より、四小の職員を地域の方々にも知っていただくことができた。

今後の課題としては、まだ、全部の職員が活動できたわけではないので、もっといろいろなことに挑戦して、地域や保護者の方々とたくさんふれあう機会をつくっていきたいと考えている。また、参加者を広めるためにも、参加者のニーズを聞きながら計画していかなければと思っている。

講師招聘による 研修会

壱岐市立霞翠小学校



1 ねらい

学校教育だけで教育を完結することはできない。家庭や地域と連携・協力する意義がそこにある。しかし、激しく変動する社会の中で、子どもたちを取り巻く環境も大きく変化し、それぞれの担うべき機能は十分発揮されているとは言えない現状にある。そこで、学校・家庭・地域社会がそれぞれの役割を見つめ直し、協働するなかで、本来の教育機能を発揮し、バランスのとれた教育を行っていく必要があると考える。

上記の目的を達成するためには、社会的な視野に立って学校教育の在り方に一石を投じてもらい、教師の意識改革を促す必要があると考え、講師招聘による研究会の実施に取り組んだ。

2 講師紹介

講師 三浦清一郎先生（社会システム研究者）

国立社会教育研修所、文部省（現在の文部科学省）を経て福岡教育大教授。この間米国シラキューズ大学、北キャロライナ州立大学のフルブライト交換教授。のち福原学園常務理事、九州共立大、九州女子大副学長。平成12年三浦清一郎事務所を開設、生涯学習通信「風の便り」編集長。

3 研修の概要

年に3回、研修会を実施し、3ヶ年の継続指導を受けた。本校研究への提案、指導助言、生涯学習の視点に立った実践例の紹介、学社融合を推進するための必要な視点等総合的かつ継続的に指導をいただいた。

4 研修の実際

3ヶ年間でいただいた指導は、紹介しきれないほど数多い。その中から特に学校現場への職員の意識の変革に役立ったと考えられるものを紹介したい。

人生の実力について

教育の最終目標は子どもの「自立」を助けることである。自立のためには、「生きる力」が必要である。生きる力とは人生の実力である。実力は、体力、耐性、道徳性、学力、感受性である。したがって、家庭、学校、地域の教育力とは、これらの目ざすプログラムを提供できることである。

教育力について

「教育力」とは、「プログラム及びその遂行能力」である。学校現場はプログラム遂行において情緒的な言葉を多用しがちである。「基準」を示さない限り、「生き生き」の中身も、「たくましい」の中身も具体的にはならない。それぞれのプログラムにおいて、具体的な状況診断ができる評価基準を示すこと、効果的な処方を検討できる指導方法を確立していることが重要である。また、家庭や地域との協働を目ざすとき、学校側がどのようなことに取り組み、子どもたちがどのような変容を遂げたのか、具体的に示すことが必要である。

それを受けて本校が取り組んだこと

タフの実力の構成要素の明確化

(体力・忍耐力・道徳的実践力・学力・表現力・コミュニケーション力)

目標の共有化

(学校が目指す具体的な子ども像を保護者や地域に発信し、学校側の方針を理解してもらう。)

タフプログラムの作成

(タフの実力の構成要素に沿って本校独自のタフプログラムを作成する。プログラムは、心身をきたえるプログラム・学力をのばすプログラム・心をたがやすプログラム・表現をみがくプログラムの4つとする。プログラムは、3期に分けて作成し、到達目標はできるだけ児童の行動目標とする。また、3期ごとに評価基準を設定し、随時評価しながら、指導方法の改善を図る。)

プログラム作成においては、家庭や地域との協働により、教育効果を上げると考えられることは積極的に協働に取り組んでいく。

研修会の持ち方

プログラムの遂行状況をプログラム担当者が研修会で報告すること。そして、全員発言が原則。

それを受けて本校が取り組んだこと

評価基準に照らし、子どもがどう変わったのか、何が子どもを変えたのか、どうすればもっと変えることができるのか等の視点でレポートをまとめる。各プログラム別に担当プログラムについて全職員が報告する。



研修会は、常に外部からの参観があり、多いときには、30名を超えた。

5 職員の感想集

- ・ 社会が必要としている力という視点から指導していただいたので非常に説得力があった。身につけさせたい力を明らかにすることで、具体的な指導方法を考えることができた。
- ・ 実際に話を聞くことで理論がすっきりと整理できた。定期的に指導していただくことで研究の方向性を確かめたり、見直したりすることができた。
- ・ ずばり本校に不足している力を見ぬかれた。三浦先生のおかげで研究の輪が広がった。
- ・ 教師だけでは見えない部分やなかなかふれられない部分についてストレートに意見を言うていただくことで発想の転換ができた。
- ・ 三浦先生が言われたことを実践すると必ず結果が出た。
- ・ 客観的な視野や緊張感の中での研修会でとてもためになった。
- ・ 子どもをきたえるという意味で様々な柱となる考え方を与えていただき実践の励みとなった。
- ・ 子どもは保護しなければ生きていけない存在だが、目指すものは保護を必要としない「自立」。教育の難しさを改めて突きつけられた。



6 成果と課題

指導を受け、取り組んできたプログラムのほとんどが、大きな成果を上げた。それを子どもの変容データとしてしっかり記録に残すことができた。また、職員のアンケート結果からは、教師間の連携や協力、地域や家庭との連携、教育活動や学校運営に関する意識の変容が見られた。上記の感想も含め職員の意識改革が確実に進んだことが伺える。

全職員による 企業等体験研修

対馬市立南陽小学校



1. 企業等体験研修の概要

本校では、職員の研修として夏季休業中に校長以下全職員が地元企業等で3日～5日間の職場体験研修を行う「企業等体験研修」を行っている。この研修は、平成14年から実施しており、今年度で3年目を迎えた。

企業等体験研修は、教師自身の社会性の向上や企業のサービス精神・経営努力を学ぶこともその目的の1つではあるが、学校の職員が外に出かけて「学校を開く」ことで学校の姿勢をより多くの地域住民の方に知っていただくこと、またそのことで多くの企業等従事者をはじめ、地域の人たちとの関係を構築していくことも大きな目的の1つとなっている。

研修に際しては、職員がそれぞれ研修の受け入れ可能な地元の企業等を探し、日程や研修内容の打ち合わせを行っている。また、研修後には職員での研修報告会を行い、学校便りに研修後の一言感想を掲載し、地域の方や保護者に配布するようにしている。

2. 研修の実際

3年間の企業等体験研修で、延べ28人の職員が28事業所を訪問し、延べ約100日間の研修をさせていただくことができた。主な事業所は次のようなものである。

事業所名	業種
ライフベース上対馬店	ホームセンター
タケスエ	スーパーストア
あゆみ園	福祉施設
結石山荘	介護老人保健施設
合歡の木園	老人福祉施設
栽培漁業センター	水産業
郵便局	公共団体
上対馬荘	公共宿舎

研修を始めた当初は、上対馬地区に事業所そのものが少なく、危険を伴う業務は行えないなどの理由で受け入れ先を決定することが容易ではなかったが、回を重ねる毎に事業所や地域の方々の理解や協力が得られるようになり、また、研修を行うことで、さらに違った職場を体験してみたいという職員の意識の変化も見られたことなどから、いろいろな事業所での研修が行われるようになってきた。

職員 A の研修（研修 2 日目）

事業所：スーパーストア

【研修日程】

精肉部での研修・作業
食品の倉庫出し・店頭出し
食品の前出し
大売り出しのちらし配り



【所感】部門別の担当者責任管理体制，商品の位置・並べ方等の工夫，通路管理，商品数の確認と発注，倉庫管理等々，「巨視的，微視的，複眼的」視野にたった経営の一端及び従業員の方々の的確な「商品知識，商品理解力，商品表現力」「気づきと行動」の大切さを学ばせていただきました。

3．成果と課題

地元の事業所での研修ということもあり、それぞれの事業所で勤務されている方の中には、保護者や本校区の出身者も少なくない。そうした方々とのつながりが一層深まっていることと共に、これまで本校とは距離のあった職員の方々も気軽に声をかけてくださり、新たな関係が生まれている。それは、職員にとっても財産となっているが、子どもたちが地域に密着した学習を進めるにあたって、大きな力となっている。

上対馬町子ども議会

この企業等体験研修をきっかけに「異業種交流会」が生まれ、年に1、2回程度の懇親会が開かれるようになった。そしてそこでの会話が一つのきっかけとなって行政が市に移行する前の「上対馬町子ども議会」を開催できることとなった。議会では町長や助役、教育長をはじめ、各町長部局の課長さん方に実際に答弁に立っていただき本議会さながらの貴重な体験学習を行うことができた。

老人保健施設訪問

本校4年生の今年度の総合学習では、「みんなにとってやさしいまちづくり」をテーマに学習を行っているが、実際に職場研修を行った介護老人保健施設に出かけ、子どもたちに「やさしいまち」とはどういうことかを考えさせることができた。こうした学習を進める際に、教員が利用者や事業所の職員との関係を築いており、施設などの面も把握できていることは様々な面に置いてプラスになることは言うまでもなく、また、利用者の思いなどを自分の言葉として話せることで、子どもたちへの指導にも役立てることができた。

この企業等体験研修を通して、地域とのつながりが深まったことだけでなく、こうした研修を行うことで、教師としての資質はいろいろな意味で高められていると考えている。研修に際して、職員が同じような意識を持つことで研修の価値は一層高まるものだと思うが、今後も本校では、職員間の共通理解を図りながらこうした研修を進めていきたいと考えている。